

# 第27期考古学セミナー（2025年度）

## —日向洞窟遺跡西地区と縄文時代草創期の置賜—

### 第1回講座

講義①

### 日向洞窟遺跡西地区の調査と 縄文時代草創期の置賜の概要

山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館館長

渋谷 孝雄

令和7年9月21日（日）

会場 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館研修室



# 日向洞窟遺跡西地区と縄文時代草創期の置賜の概要

## はじめに

日向洞窟遺跡は山形県東置賜郡高畠町にある。洞窟とその前面に広がる平地に縄文時代の草創期の遺物包含層と遺構が残されている。

最初の発掘調査からすでに 60 年以上が経過した。この調査の成果については調査に携わった方々の論文や県史、町史に著されたが、纏まった報告はなされなかった。この間、1970 年には高畠町教育委員会による洞窟前的小規模な発掘調査が行われ、山形県立博物館研究報告に調査概要が報告された(佐々木年)。高畠町教育委員会では 1987 年から 89 年までに町道建設にかかって発掘調査を行った日向洞窟遺跡西地区の発掘調査報告書を 2024 年度に刊行した。西地区の調査成果については 2006 年に東北学院大学の佐川ゼミナールによって『日向洞窟遺跡西地区出土石器群の研究』として纏められたが、正式報告書は未刊であった。

日向洞窟遺跡の調査が縄文時代の始まりの研究にどのような役割を果たしてきたのか、また、日本列島における土器の出現と展開について、現在どのように考えられているのかを紹介しつつ、置賜地域の草創期の遺跡について触れ、後半で日向洞窟西地区の調査の経過を紹介したい。

## 1、土器の出現と弓矢の登場

後氷期の気候の温暖化により、日本列島を覆っていた冷温帯落葉広葉樹林や亜寒帯針葉樹林が徐々に北方に押し上げられ、それに伴って植物相、動物相が変化していった。主として狩猟が生産基盤であった旧石器的な生産活動から、新たに魚撈や貝の採取が加わって貝塚を形成するといった縄文的な生産活動に移行する過渡期として、生産用具の石器組成も徐々に新しい組合せに変化していった。

こういったなかで土器の出現は新たな食糧資源の獲得を可能ならしめたという点で、最も重要な画期であるという考え方が多くの支持を集めている。

しかし、日本列島及び周辺地域の土器の出現は気候の温暖化の前に遡ることが、近年の調査・研究や  $^{14}\text{C}$  年代測定結果によって明らかにされつつある。日本列島最古の土器はその後の縄文時代を支えた落葉広葉樹林帯の中から出現したものではないことも明らかになりつつある。

堅果類が主要な食糧となる前に既に土器は出現していた。最初の土器はサケ・マス等から油を探るために使われたという説(工藤 2014)もある。土器の出現とその背景については今のところ万人を納得させるような説明ができる状況にはないが、現在では日本列島で土器が出現したのは、今から 16000 年前に遡るものと考えられている。ここで、縄文土器の出現を巡る学史を振り返ってみよう。

## 2 最古の縄文土器と系統関係の追究

1930年代の前半段階では尖底で沈線文や貝殻文をもつ三戸式、田戸式や同じく尖底で押型文をもつ土器が日本列島の最古の土器として知られていた。これらの土器は器面に縄文がなく、「縄文」手法発生以前の土器と考えられていた。ところが、1939年に稻荷台遺跡の調査が行われ、撚糸文土器が（白崎 1941）、翌1940年には井草遺跡の調査が行われ口縁部の肥厚する撚糸文土器が発掘された（矢島 1942）。この2遺跡の発掘調査で縄目の付いた土器と、押型文、貝殻沈線文など日本列島の土器の出現時には回転押型文・撚糸文をもつ南系統の文化（稻荷台系文化）と沈線文・貝殻文をもつ北系統の文化（田戸・住吉町文化）が並存していたという南北二系統論も主張された（江坂 1944）。

また。これらの土器は一部ローム層にくいこんで発見されることから、1943年、後藤守一はこれらの土器は7~8千年前のものであろうという考えを述べた（後藤 1943）。

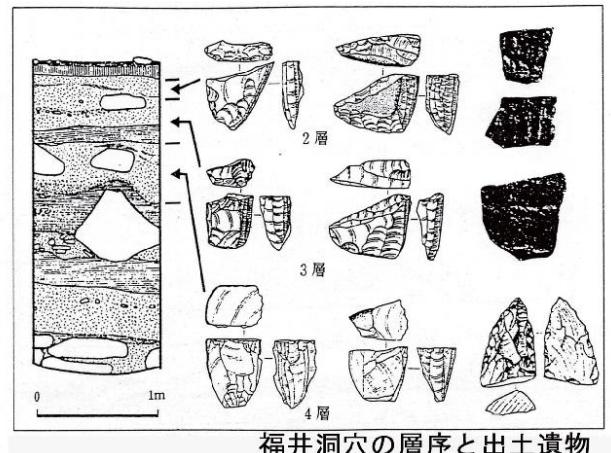
南北二系統論は1950年の夏島貝塚の発掘調査（杉原・芹澤 1957）で撚糸文土器の上層で沈線文土器が出土することにより、この考えも成り立たないことが証明され、続く1951年の大丸遺跡の調査で撚糸文土器の編年が確定した（芹澤 1956）。また、夏島貝塚で<sup>14</sup>C年代の測定で撚糸文土器の年代がBP 9450±400と測定されたことは大きな衝撃を与えた（芹澤 1959）。この時点では縄文土器は世界最古の土器となった。

これとは別に、山形県高畠町では山形大学の柏倉亮吉によって縄文時代早期の遺跡探索が行われ、日向洞窟で採取された土器をきっかけに1955年10月に発掘調査が行われ、柏倉は出土した土器を縄文土器研究の大家である山内清男のいた東京大学人類学教室に持ち込んで教えを乞うた。山内清男は縄が何段にも縦に押された土器に着目し、最も古い土器になる可能性を伝えた（山内 1971）が、同時に持ち込まれた隆起線文土器については、この段階では、まだその位置づけについてのコメントはなかった。

## 3 日本列島最古の土器の発見と時代・時期の呼称と画期の問題

1960年の長崎県福井洞穴の発掘調査において、第4層から細石刃と尖頭器、第3層から細石刃と隆起線文土器、第2層から細石刃と爪形文が出土し、旧石器時代の最終末で日本列島に土器が出現することが明らかにされた（芹澤 1960）。この土器は日向洞窟で最初に出土していたものであったが、この調査で日本最古の土器となることが判明した。また、第3層の<sup>14</sup>C年代は12700±500BPと測定され、世界最古の年代を持つ土器であることが明らかとなつた。

福井洞穴の調査は日本考古学界の長い間の懸案であった縄文時代の開始時期に手がかりを与えるものとなつたほか、旧石器時代と整合的に連続して土



器文化が始まることも明らかとなった。

ただし、調査者の芹沢長介、鎌木義昌は福井洞穴で発見された隆起線文土器と爪形文土器は併出する石器からみて、旧石器時代から新石器時代への過渡期の文化と位置づけ、芹沢は晩期旧石器時代ないしは中石器時代と呼んで、縄文時代と一線を画した(芹澤 1967)。しかし、「晩期旧石器時代ないしは中石器時代」の用語は芹沢の死により、使われることも少なくなった。

一方、<sup>14</sup>C年代による夏島貝塚の縄文土器が9000年を越える年代となったことに対して、1962年、山内清男は<sup>14</sup>C年代による年代が概ね妥当とする芹沢長介に激しい反論を加え、日本における無土器時代の石器は磨製石器を伴う新石器時代の所産であり、縄文時代の開始はBC3000年を越えることはないとした。また、隆起線文土器や爪形文土器、それとそれまでの最古の位置を占めていた撫糸文土器を含め、早期の前に「草創期」を設定した(山内・佐藤 1967)。

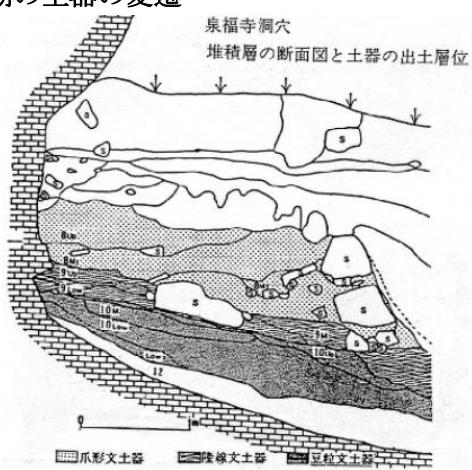
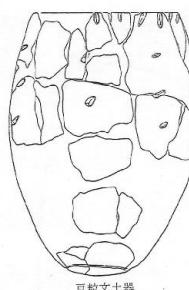
日本の土器のない石器文化を洪積世の所産とし、<sup>14</sup>C年代を肯定しながらも先土器時代と呼んだ杉原莊介は1967年に撫糸文土器より古い一群の土器は、縄文土器と系統を異にするのではないかという見解を示し「原土器時代」と呼んで縄文時代と一線を画した(杉原 1967)。しかし、「原土器時代」の用語は1983年の杉原の死によって自然消滅となった。

草創期を設定した山内清男は隆起線文土器に伴う矢柄研磨器と呼ばれる石器や断面三角形の錐、土器を伴うと考えた本ノ木遺跡と類似する尖頭器(石槍)と同時期とみられる神子柴・長者久保などの石器群に伴う局部磨製石斧(丸ノミ)の大陸での年代比較で、隆起線文土器で始まる縄文土器の開始時期、すなわち縄文時代草創期の開始年代は紀元前2500年を遡らないとして、さらに新しくして(山内 1968)いわゆる縄文時代短期編年説を唱え芹沢らと激しく対立した。

縄文土器短期編年説は山内清男の1970年の死後も佐藤達夫らによって引き継がれ、佐藤の死後は岡本東三がその立場で発言を行っている(岡本 1979)が、現在はこの説に固執する研究者はほとんどいなくなった。

#### 4 隆線文土器を溯源する土器の発見と変遷、草創期の土器の変遷

山内清男の唱えた「草創期」は小林達雄によって改めて隆起線文土器から多縄文系土器までの時期として短期編年説から切り離されて設定された。1970年に始まる長崎県泉福寺洞窟の調査で隆起線文土器の下層から豆粒文土器が出土し(麻生 4984)、同年の神奈川県相模のNo.149遺跡では刺突文土器と有舌尖頭器・槍先形尖

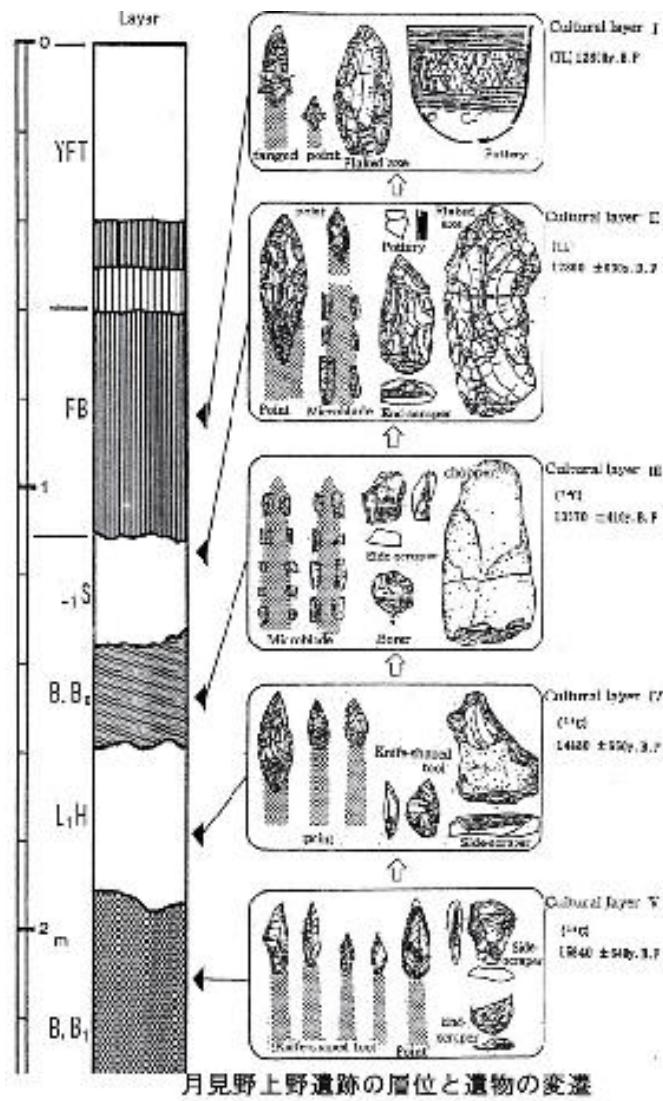


頭器・石斧などが共伴し、列島の土器出現はさらに溯る気配を見せた。1972年には京都府武者ヶ谷遺跡で口縁部が肥厚し、その部分に刺突文が施される小形の土器が出土した（相模の考古学研究会1978、渡辺・鈴木1977）。そして、1975・76年の青森県大平山元I遺跡、1975年の茨城県後野遺跡で神子柴・長者久保石器群に無文土器が伴って出土し、これまで無土器とされていた石器群に伴ったことで、その古さに注目が集まつた（勝田市教育委員会1976、青森県立郷土館1979）。

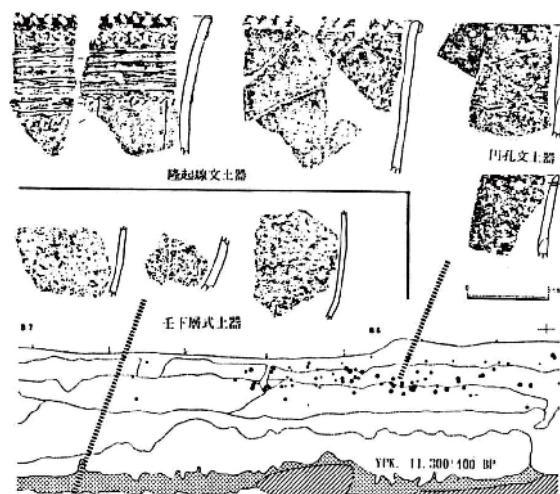
1977年の神奈川県寺尾遺跡、1979年の同県月見野上野第1地点第2文化層の調査では無文土器や刺突文土器が細石刃や有舌尖頭器、槍先形尖頭器を伴い、第1文化層では隆起線文土器が出土した（神奈川県教育委員会1980、大和市教育委員会1986）。

1998年の大平山元I遺跡から出土した無文土器に付着した炭化物の年代測定の結果、最も古いものが暦年較正値でBP16520年、平均値でもBP15550年という値が得られ、その古さに衝撃が走った（谷口1999）。

現在では隆起線文土器を溯源るものとして、古段階の大平山元Iや後野Bの無文土器から第1段階の刺突文をもつ寺尾、多摩ニュータウンNo.796、武者ヶ谷、そして、第2段階の相模野No.149、月見野上野第1地点第二文化層を経て、隆起線文土器に繋がる泉福寺洞穴の



月見野上野遺跡の層位と遺物の変遷



隆起線文に先行する土器型式の存在（1）（層位的事例：新潟県壬遺跡）

壬遺跡の層位的出土

豆粒文土器へと変遷したと考えられている。

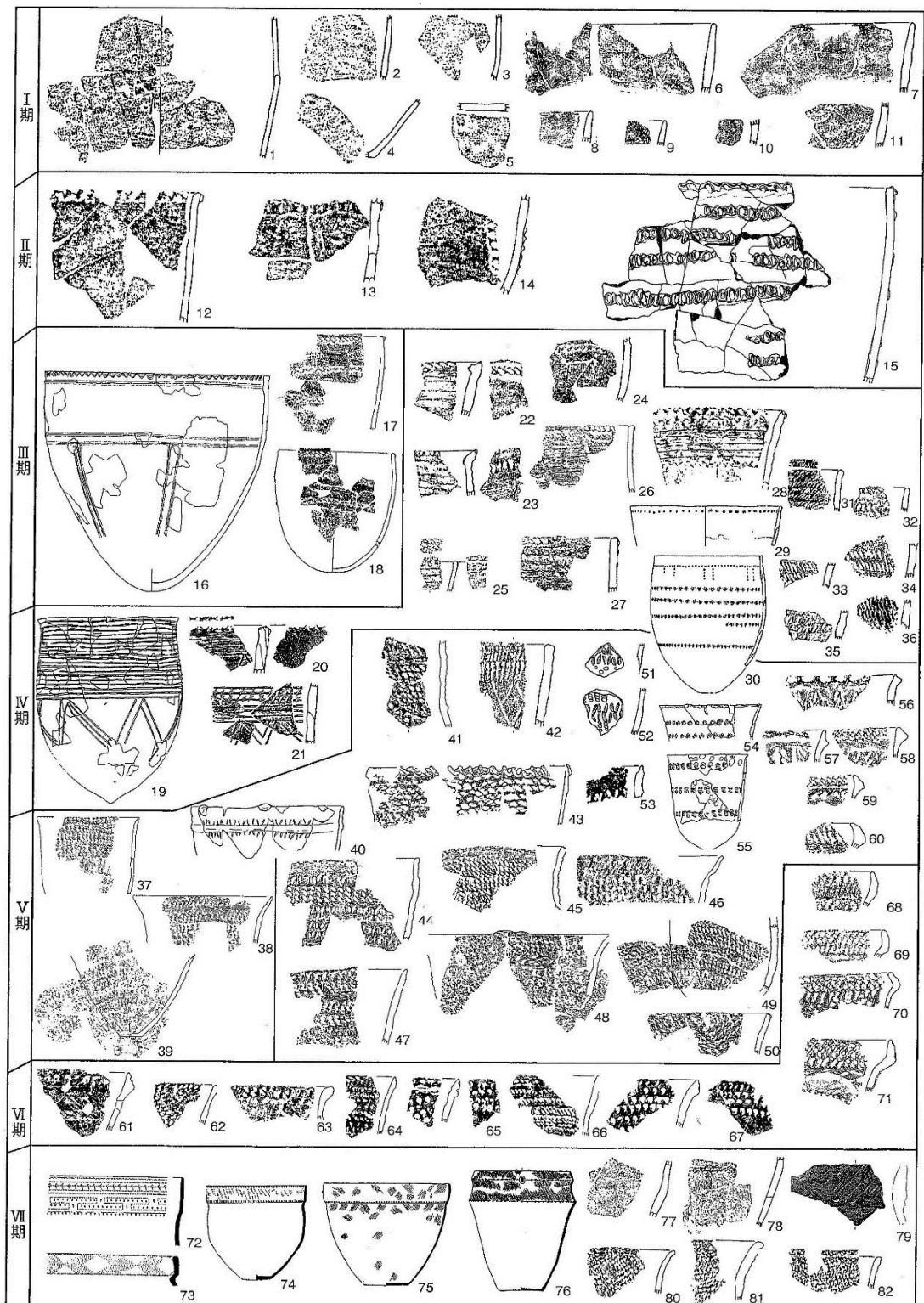
## 5 信濃川流域の縄文時代草創期の土器変遷

隆起線文以降の草創期の土器の変遷は多くの資料が出土している信濃川流域ではつぎのように考えられている（佐藤 2019）。I期—隆起線文土器以前の土器。十日町市壬遺跡と津南町屋敷田Ⅲ遺跡の無文土器。II期—幅広い隆帶文土器。単条(壬)から複条(田沢)へ変遷。III期—隆起線文土器で口辺部と胴部上位の2带構成の文様配置が安定する。久保寺南遺跡が標本資料。IV期—口辺部施文域が多条化。鋸歯状モチーフが胴部上位に下降し、口唇部及び、口縁部内側に加飾されるものが出現。円孔文、爪型文も出現。日向洞窟遺跡はこの段階。V期—多縄文系土器の前半期で本ノ木式土器の時期。VI期—多縄文土器段階の後半期。自条自巻原体が安定的に採用。半截多軸絡体圧痕文が顕著に施文される。VII期—多縄文土器後半

		標識資料				系統	新潟	関東	東北
		上越	中越	下越	佐渡				
前半	I期		壬下層			無文土器群 隆起縄文系土器群	壬下層	寺尾後野	大平山元
	II期		壬田沢				田沢	南原	
	III期		久保寺南	小瀬が沢1				花見山	
	IV期		干溝 屋敷田Ⅲ 壬西倉	小瀬が沢2		爪円形孔系文土系器群 押回転縄文系土系器群		小島田八日市	日向I類
	V期	柘窪	本ノ木 卯ノ木南	小瀬が沢3 小瀬が沢4			本ノ木		
	VI期		元中子	小瀬が沢5 小瀬が沢6					一ノ沢
後半	VII期	大堀	小丸山 堰下 黒姫洞窟V・VI層				室谷下層1 室谷下層2 室谷下層3	大烟岩陰	

期末の室谷下層式土器。

信濃川流域の縄文時代草創期の編年表(佐藤 2019)



1~5:壬下層,6~11・22~24:屋敷田Ⅲ,12~14・20・21・28~30・43:壬,15:田沢,16~17:久保寺南,19:干溝,25・41:黒姫洞窟,  
26~27:百姓西C,31~36・51・52:西倉,37~40:本ノ木,42:寺田上A,53:金塚,54・55:卯ノ木,56:小丸山,  
57~60・68~71:小瀬が沢洞窟,44~50:卯ノ木南,61~67:元中子,72~76:室谷洞窟,77・78:覆下,79:貝坂桐ノ木平C

縮尺不同

信濃川流域の縄文時代草創期の土器編年図(佐藤 2019)

## 6 高畠町の縄文時代草創期の遺跡

高畠町には縄文時代草創期に遡る洞窟遺跡が 6ヶ所あり、その内の 4ヶ所が国の史跡に指定されている。日向洞窟、大立洞窟、一の沢洞窟、火箱岩洞窟である。また、神立洞窟、尼子岩陰は町の史跡に指定されている。縄文時代の国指定史跡 4ヶ所は千葉市の特別史跡を含む 5ヶ所に次いで、全国で 2番目に多い数となっている。

### (1) 日向洞窟

①名 称 日向洞窟

②所 在 地 山形県東置賜郡高畠町大字竹森字姥ヶ昨山 3163 番地他 17 筆

③発掘調査年 指定前：1955 年、1957 年、1958 年、1970 年。

指定後(指定地外の調査)

西地区(町道改良工事に伴う高畠町教育委員会による緊急発掘調査)

：1987 年、1988 年、1989 年

学術調査(東北芸術工科大学・愛知学院大学：長井謙治氏による調査)

：2013 年、2014 年、2015 年、2016 年、2017 年、2018 年、2019 年、  
2020 年

範囲確認調査(高畠町教育委員会：2016 年から国庫補助事業)

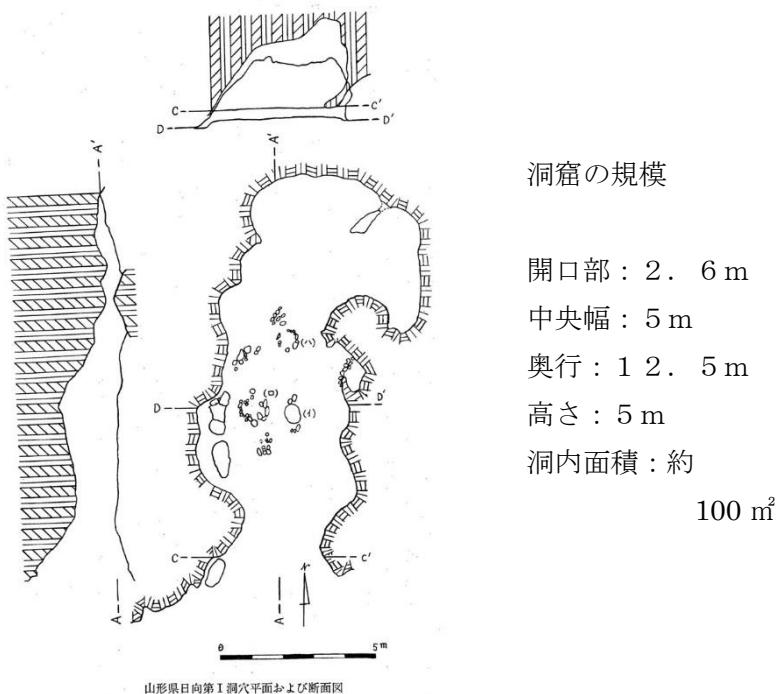
：2015 年、2016 年、2017 年、2018 年、2019 年、2020 年

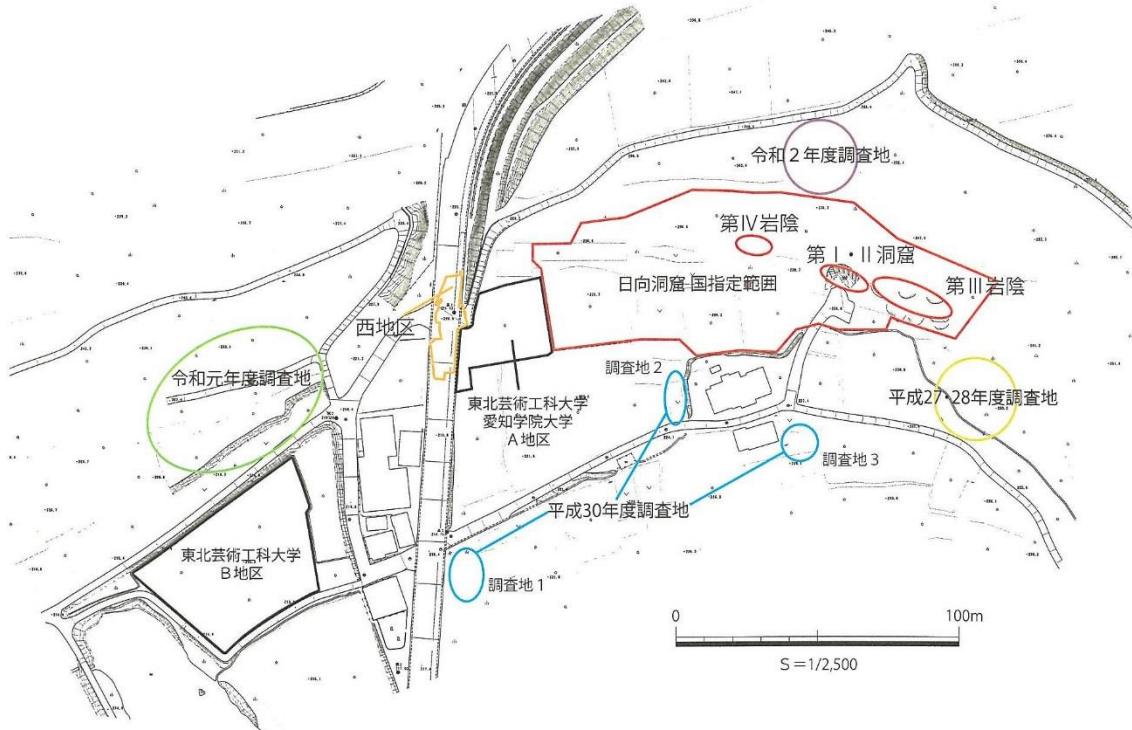
④指定年月日 1977(昭和 52)年 2 月 17 日

⑤指定面積 6,839 m<sup>2</sup>

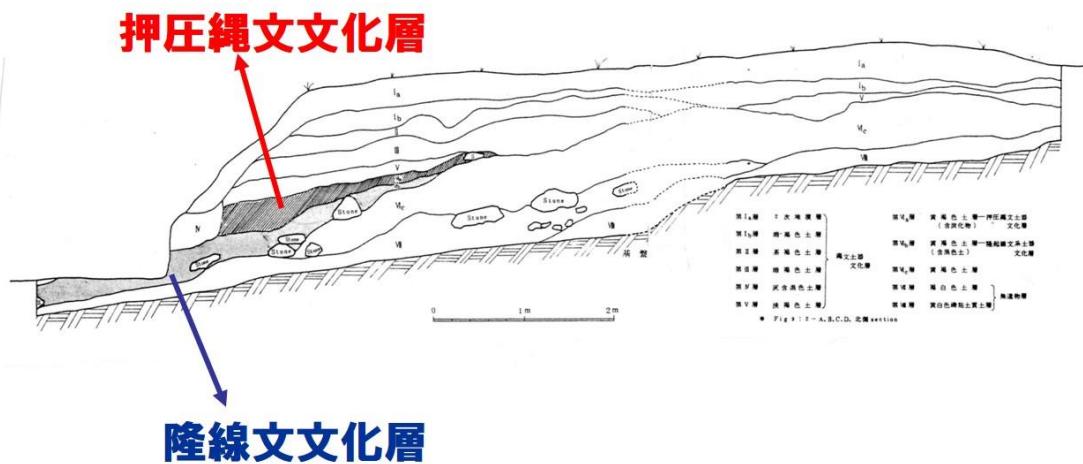
⑥土地所有者 高畠町(119 m<sup>2</sup>)、民有地：地権者 8 名(6,720 m<sup>2</sup>)

⑦管理団体 高畠町





日向洞窟国指定範囲と各年度調査区位置 (S = 1/2,500)



## (2)大立洞窟

- ①名 称 大立洞窟

②所 在 地 山形県東置賜郡高畠町大字高畠字大立山 3578 番地ノ 7 他 2 筆

③発掘調査年 山形県立博物館：1974 年、1975 年、1976 年、1977 年(75 年以降は  
国庫補助事業)

④指定年月日 1980(昭和 55)年 6 月 3 日

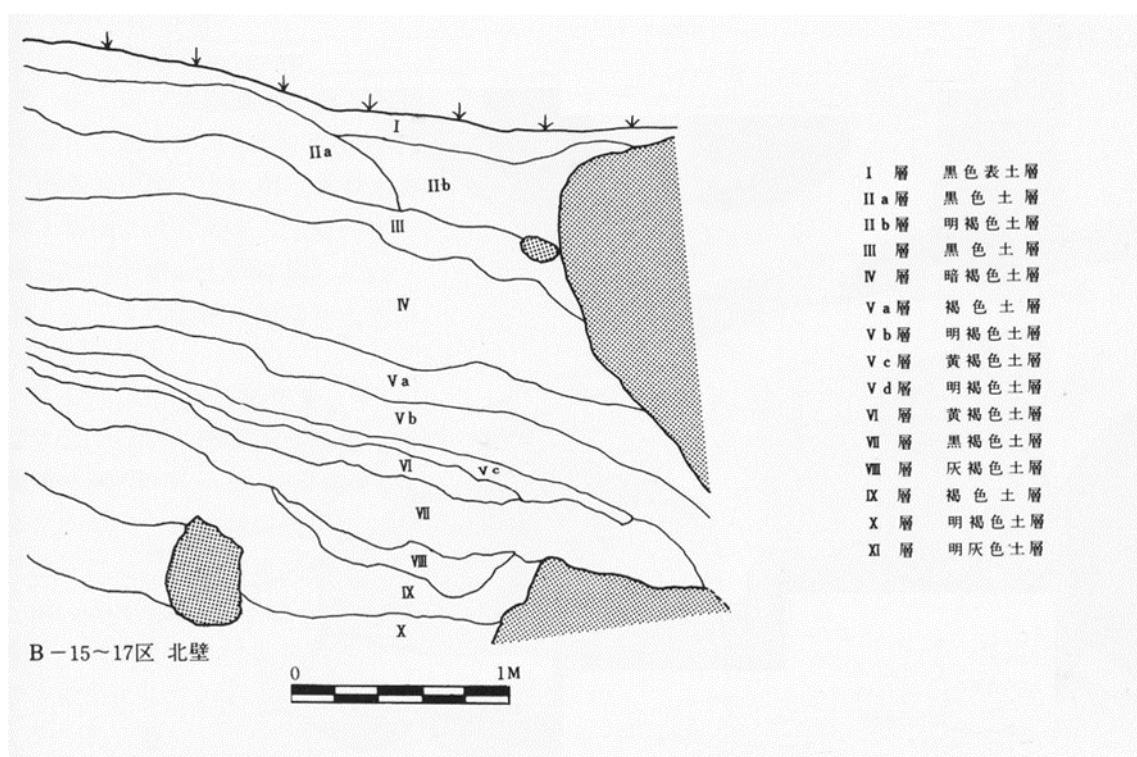
⑤指定地面積 6,476 m<sup>2</sup>

⑥土地所有者 民有地：地権者 3 名

⑦管理団体 高畠町



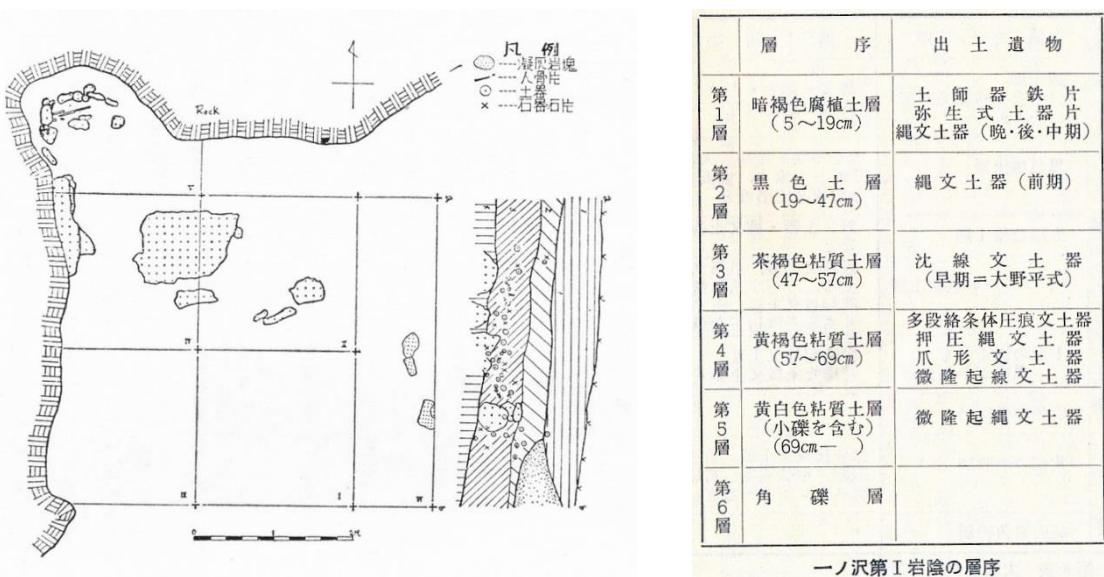
大立洞窟平面図



大立洞窟土層断面図

### (3)一の沢洞窟

- ①名 称 一の沢洞窟
- ②所 在 地 山形県東置賜郡高畠町大字安久津字一の沢 3285-16、3286-5
- ③発掘調査年 予備調査：1958年 1960年 本調査(高畠町教育委員会)1961年
- ④指定年月日 1980(昭和 55)年 9月 18日
- ⑤指定地面積 13,424 m<sup>2</sup>
- ⑥土地所有者 高畠財産区(管理者：高畠町長)
- ⑦管理団体 高畠町



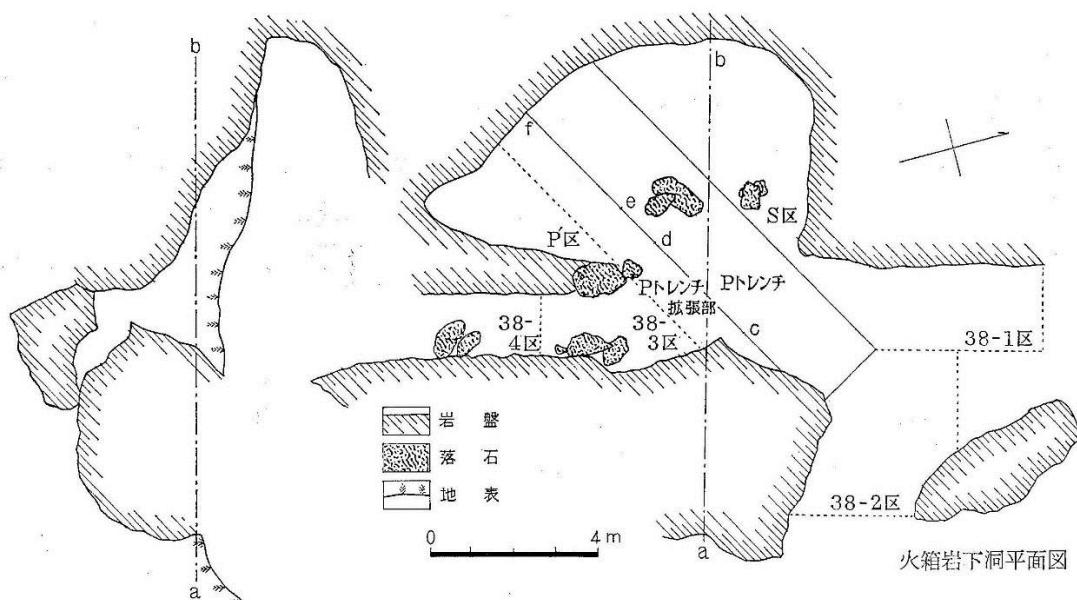
一の沢洞窟第I岩陰の平面図と層位概念図



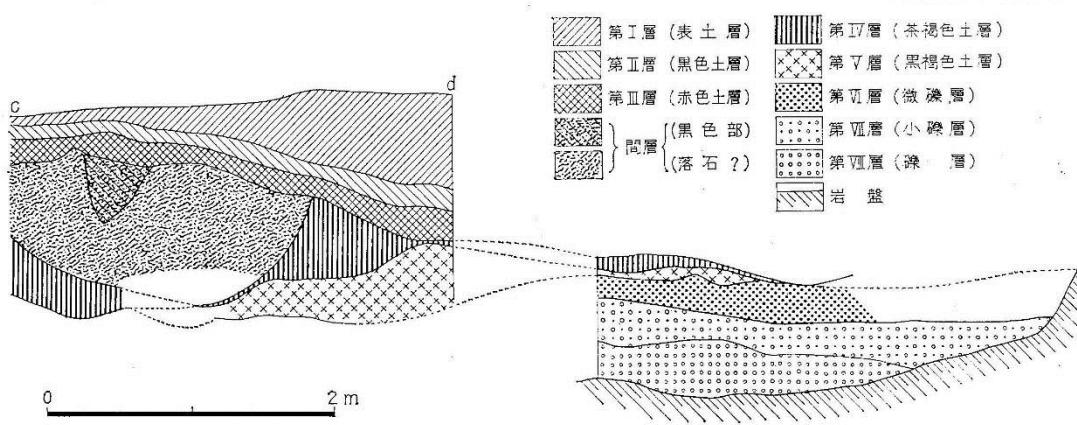
一の沢洞窟第1岩陰の押圧縄文土器

#### (4)火箱岩洞窟

- ①名 称 火箱岩洞窟
- ②所 在 地 山形県東置賜郡高畠町大字時沢字大師森 1867-1
- ③発掘調査年 1961 年
- ④指定年月日 1983(昭和 58)年 4 月 26 日
- ⑤指定地面積 22,173.87 m<sup>2</sup>
- ⑥土地所有者 民有地：地権者 4 名
- ⑦管理団体 高畠町



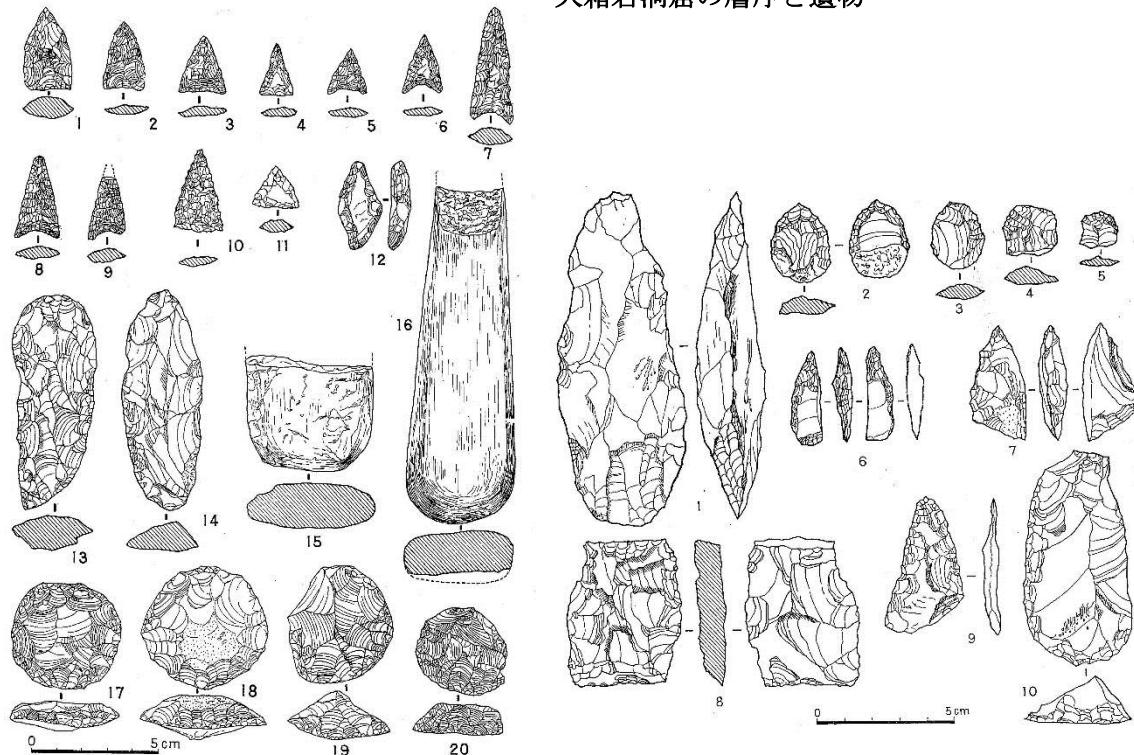
火箱岩洞窟下洞平面図



火箱岩洞窟下洞土層断面図

	P トレンチ	4 区
第 I 層	縄文, 弥生, 古墳時代の遺物混在	
第 II 層		
第 III 層	大木 7a, 大木 4, 室浜式と沈線文土器	
間 層	無文土器, 縄文土器など(黒色部より)	
第 IV 層	短縄文土器, 爪形文土器など	爪形文土器, 「ハ」の字文微隆起文土器 えぐりある二等辺三角形石鏃, 円形搔器 羽状縄文土器 撚糸文土器 押圧縄文土器 爪形文土器 微隆起文土器
第 V 層	微隆起文土器	石鏃, 円形搔器 磨石 打石斧
第 VI 層		無 遺 物
第 VII 層		細隆起文土器, 三角形石鏃, 石槍, 拇指状搔器, 打石斧
第 VIII 層		無 遺 物
基盤		無 遺 物
	(第 1 回調査)	(第 2 回調査)
		(第 3 回調査)

火箱岩洞窟の層序と遺物



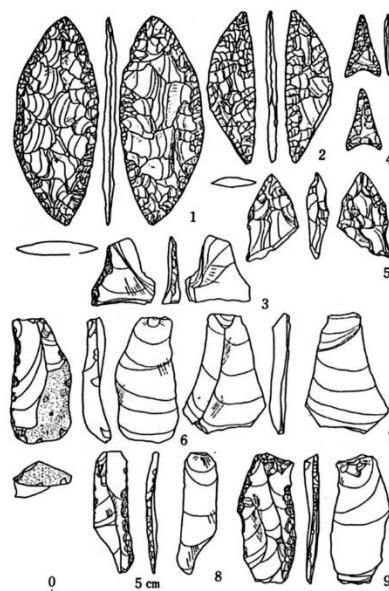
火箱岩出土の草創期の石器

### (5) 尼子岩陰遺跡(高畠町指定史跡)

- ①名 称 尼子岩陰(第Ⅱ岩陰)
- ②所 在 地 山形県東置賜郡高畠町大字二井宿字小湯
- ③発掘調査年 1957、58年
- ④指定年月日 1981(昭和 56)年 2月 10日
- ⑤指定地面積 22,173.87 m<sup>2</sup>
- ⑥土地所有者 民有地：地権者 4名
- ⑦管理団体 高畠町

	層 序	出 土 遺 物
第1層	褐色腐植土層 剥離凝灰岩の 小礫を表面に 堆積した	縄文土器 (晩期・中期)
第2層	黒色腐植壤土層	縄文土器 (中期～早期末)
第3層	灰褐色壤土層 灰分を多く含む 一種の混貝土層	無文土器
第4層	黄褐色粘質土層 凝灰岩小礫を 含む	短縄文押圧土器
第5層	凝灰岩角礫層	石 槍 ノツチト・ スクレーパー

尼子第Ⅱ岩陰の層序

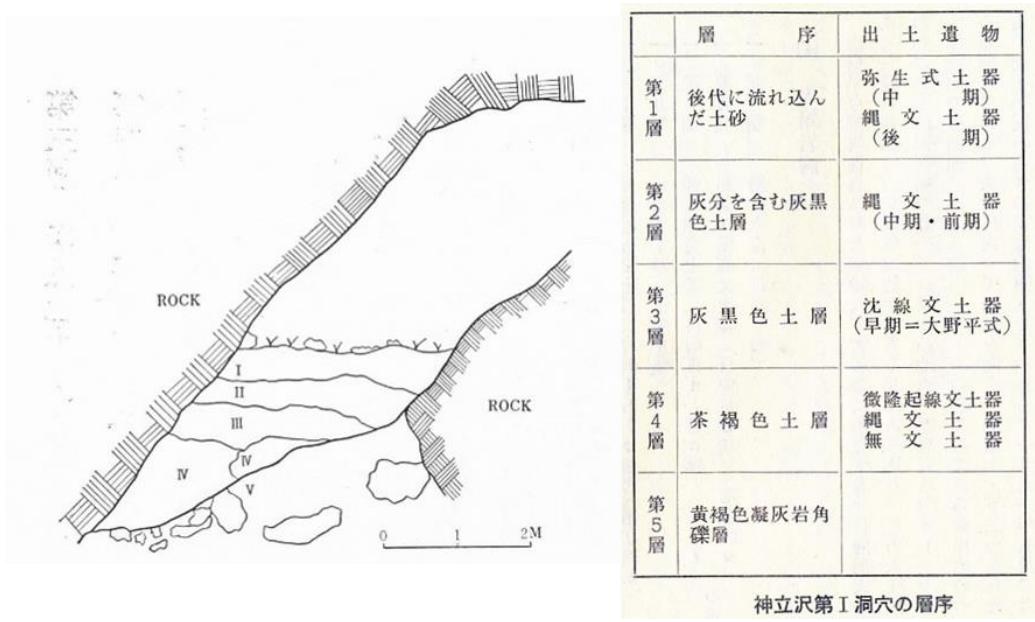


尼子岩陰の石器

1～3：第6層 4～9：第5層

### (5) 神立洞窟(高畠町指定史跡)

- ①名 称 神立洞窟
- ②所 在 地 山形県東置賜郡高畠町大字安久津字大神立
- ③発掘調査年 1961年
- ④指定年月日 1981(昭和 56)年 6月 5日
- ⑤指定地面積
- ⑥土地所有者 民有地
- ⑦管理団体



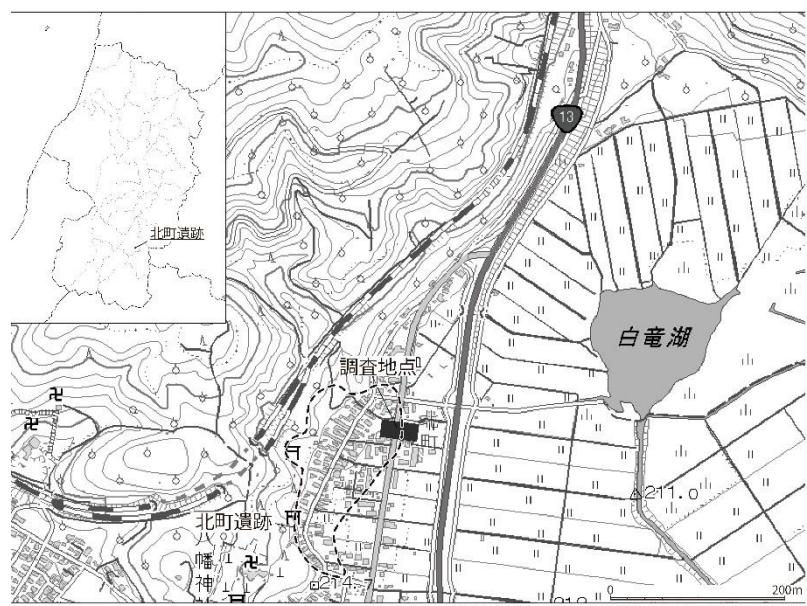
## 7 置賜の縄文時代草創期の遺跡

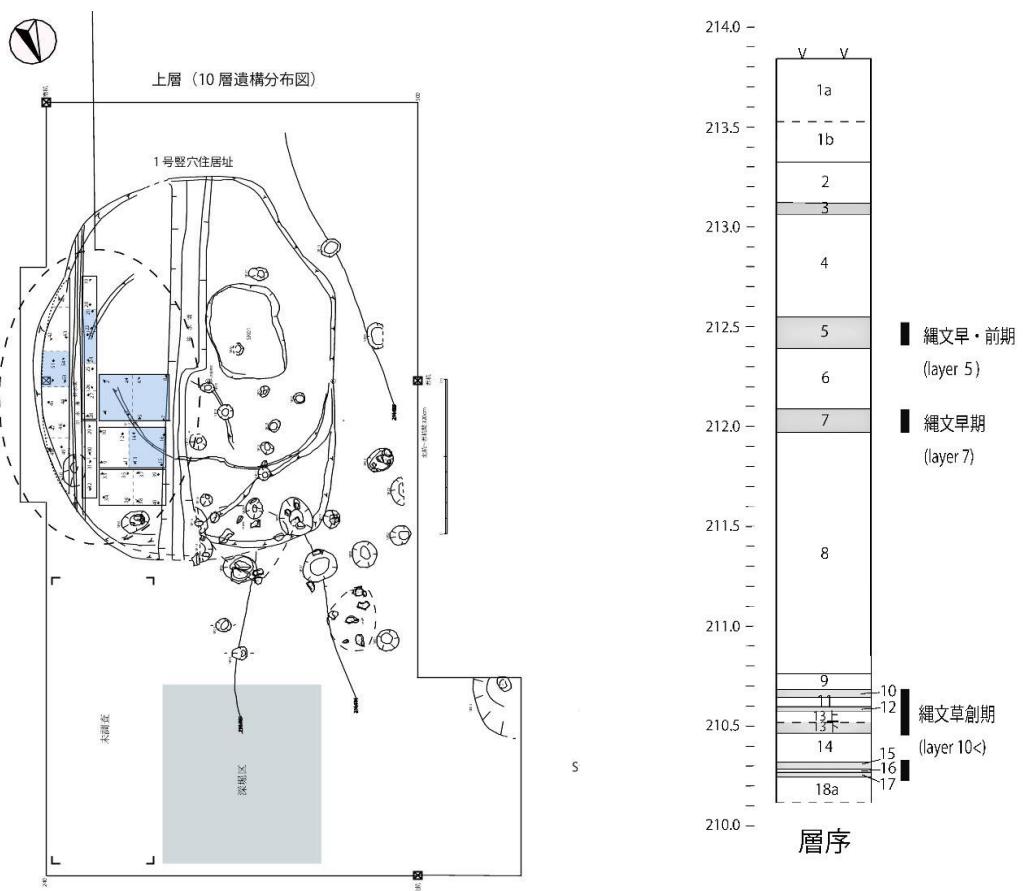
高畠町以外の縄文時代草創期の遺跡を見てみよう。

### (1) 南陽市の遺跡——北町遺跡、松沢遺跡？

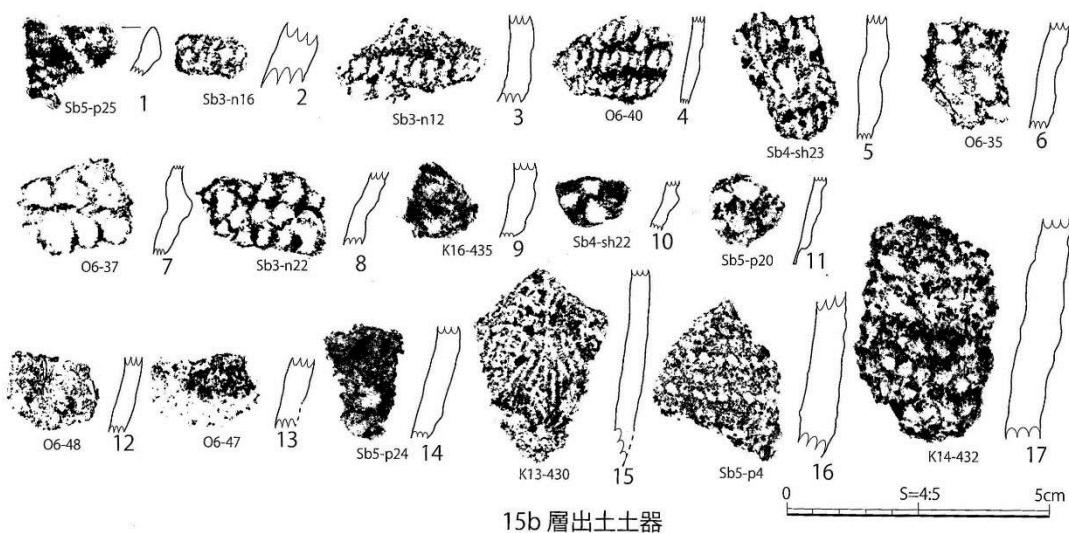
北町遺跡は南陽市赤湯字新田前二他に所在し、1985.96年の工事立会調査で草創期に遡る遺跡であることが判明した(佐藤・秦 2010)。その後、小規模な開発による発掘調査や工事立会がドドメキ地点や新田前地点で行われ(長井編 2020、その後、ドドメキ地点で愛知学院大学長井准教授による学術調査が2024年まで継続して行われた(長井他 2020等)。

発掘調査では、縄文時代草創期の動植物遺体を含む泥炭質土壤と複数の文化層が検出された。草創期文化層のうち、最上位の10層で回転縄文・窓文、12層で押圧縄文、15層で爪形文を検出し、同層で櫛目文土器も確認された。「小瀬が沢洞窟の調査以後、長らく未解決となっていた窓文・櫛目文土器の起源問題を含め、草創期後半の土器編年を層序と遺構に沿って細かな時間スケールで再構成するこ





とができる（長井他 2019）」といふ。さらに一連の草創期文化層から炉、集石、礫群、埋納（デポ状）遺構、月山産の黒曜石、本州系の曾根型長脚鏃、北方系の小型舟底形石器・神子柴型石斧も見つかっており、「タイプトゥールの機能と移動ルート、交流、伝播・系統関係を明らかにしうるであろう（長井・角田 2019）」との評価がある。

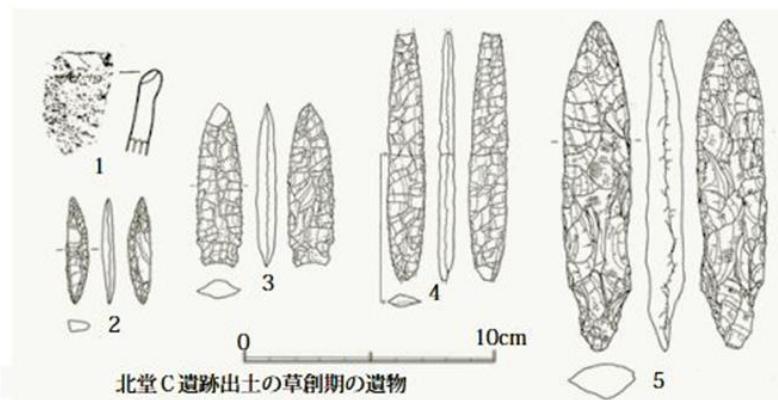


## (2) 長井市の草創期の遺跡——北堂C遺跡

長井市勧進代にある北堂C遺跡では1982年の長井市教育委員会の試掘調査で旧石器時代末葉から縄文時代草創期の遺跡になる可能性が指摘された。

このような期待を背景に國學院大学による発掘調査が1985年と86年に行われた。

このような期待を背景に國學院大学による発掘調査が1985年と86年に行われた。85年の調査では口唇部に縄文を押捺した小破片の土器(1)が出土した。佐藤雅一氏の信濃川流域編年V～VI期、日向洞窟の三の「多縄文系土器」に相当するものと考えられる。また、特殊な基部をもつ尖頭器(3)に類似するものが日向第一洞で出土している。そして、細身の尖頭器(4)は新潟県小瀬ヶ沢洞窟の出土例に、採集品である有舌尖頭器(5)は新潟県中林遺跡出土のものに類似する。これらは、草創期の所産と考えられるが、断片的な資料であることは否めない。したがって、当該期の長井市に草創期人が足を踏み入れたことは確実だろう。



## (2) 飯豊町の草創期の遺跡——上屋地A遺跡

飯豊町の上屋地遺跡A地点で土器の出土はないものの、尖頭器、打製片刃石斧、搔器などが出土している。現在的認識では縄文時代草創期のもので、近年、山形県下で最古の中前期旧石器時代のものとされていた下の段丘のB地点で出土した石器群がA地点の石器製作地であるとの評価が出されている(会田 2018)。

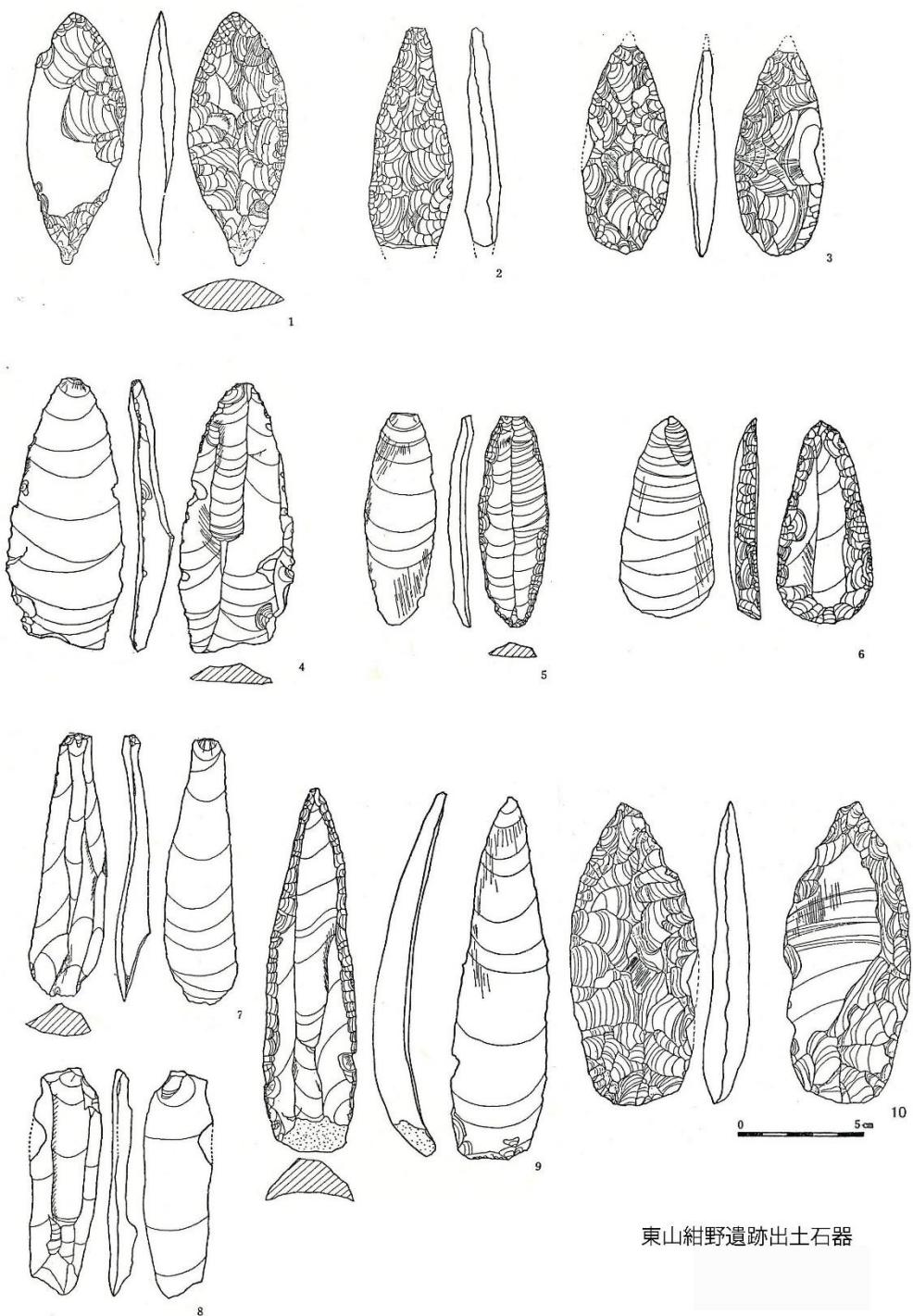
## (3) 小国町の草創期の遺跡——東山紺野遺跡、鳥谷沢遺跡

### 東山紺野遺跡

東山紺野遺跡は西置賜郡小国町大字岩井沢(字平林)500番地他に所在し、現在町の野球場となっている東山遺跡の北方の海拔170mの洪積中位段丘上に立地している。1973年6月当時小国高等学校2年生であった紺野妙子さんがお父さんの嘉美氏が採集していた黒曜石製の石器を小国高等学校野口一雄教諭の求めに応じて学校に持ち込んだことが発見の契機となった。

7月に加藤稔先生によって神子柴・長者久保石器群の片刃石斧を伴う尖頭器石器群の一員であろうとの予測がたてられた。作物の収穫が終わった11月の下旬の21日から23日の3日間にわたって、出土したといわれる地点を含んで、調査区を設定して出土層準の確

認



東山紺野遺跡出土石器

と石器の分布範囲を確認する試掘調査を小国高等学校と山形大学が合同で実施した。

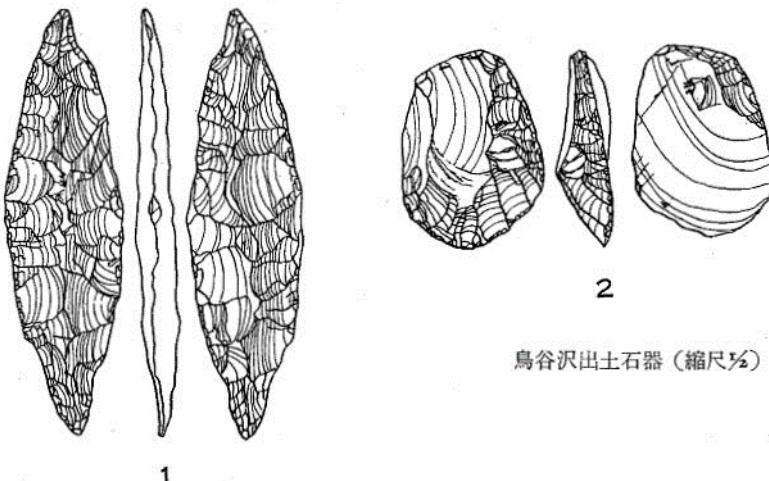
層序は I : 黒褐色壤土層(20cm)、II : 漸移層(6 cm)、III : 黄褐色粘土質層(23 cm)、IV : 灰黄褐色粘土層と続き、漸移層から 2 点の黒曜石製の剥片が出土したが、他に出土遺物は発見されなかった。

黒曜石の剥片が出土したことは、この地において、黒曜石の石器製作が行われたことを示しているが、この試掘調査では明確な石器群のまとまりを把握することはできなかつた。

紺野氏の採集した石器は尖頭器 3 点、片刃石斧 1 点、石刃尖頭器 1 点、搔器 1 点、削器 2 点、石刃 2 点の合計 10 点である。

### 鳥谷沢遺跡

小国町の横道遺跡、湯の花遺跡の北の鳥谷沢遺跡から草創期の有舌尖頭器と小形の搔器が採集されているが、詳細は不明である。



鳥谷沢出土石器（縮尺 $\frac{1}{2}$ ）

## 8 日向洞窟遺跡西地区の調査

日向洞窟遺跡西地区の調査経過を報告書から引用して、資料とする。

### 日向洞窟西地区の発掘調査概要

#### 1. 調査の経過

##### (1) 試掘調査

期間：昭和 60 年 4 月 25、26 日の 2 日間

調査地：道路改修工事計画部分にあたる約 800 m<sup>2</sup>に 2 本のトレンチ（合計 9 m<sup>2</sup>）、2 箇所の試掘坑を設定した。

成果：縄文土器、尖頭器、石鏃、打製石斧、石匙、不定形石器、剥片、チップ、礫が平コンテナ 1 箱分出土している。土器はいずれも小破片で摩滅が著しく、判別が困難であるが、最下層より貝殻腹縁文土器が出土した。結論として、遺物包含層が確認された約 400 m<sup>2</sup>を対象とし、記録保存を目的とした緊急発掘調査を実施することとした。

##### (2) 事前確認調査

期間：昭和 60 年 5 月 24、25 日の 2 日間

調査地：試掘調査の結果により設定した調査対象範囲内の空閑地に任意に試掘坑を設定した。

成果：縄文前期から中期の遺物を含む層を確認した。遺物は、少量かつ出土状況にまとまりは認められなかった。この時点では無遺物層である V 層を地山層と誤認しており、調査地に縄文早期を遡る遺物、遺構は存在しないと判断していた。

##### (3) 第 1 次調査

期間：昭和 62 年 10 月 28 日から 12 月 4 日

調査地：対象範囲のうち、G-6 グリッドから G-24 グリッドの東側に 1m 幅のトレンチを設定し掘り下げを実施した。その後、E ~ G-13 ~ 24 グリッドにおいて IV 層まで、G-17、G-18 グリッドにおいて VI 層までをそれぞれ調査した。調査面積は約 160 m<sup>2</sup>である。

経過：基本的な層序と南北方向の遺跡の広がりを確認するため、G-6 ~ 21 グリッドの東側 1m 幅にトレンチを設定し、部分的に拡張、深掘りしながら調査を進めた。試掘調査結果を踏まえ I 層、II 層を重機により土取りを行った。E ~ G-13 ~ 17 グリッド III 層、IV 層から縄文中期ごろの遺物を多数検出した。V 層に掘り進めると遺物は見られなくなった。一部深掘りしたグリッドの VI 層上面から打製石斧や剥片が出土したが、V 層以下の正確な層序の把握までには至らなかった。調査期間の終盤に G-15 ~ 18 グリッド VI 層より縄文時代草創期の遺物がまとまって出土した。

現地調査最終日、佐々木洋治氏が来跡され、VI 層の遺物が縄文草創期の資料であることを指導いただいた。降雪により調査の継続が困難となり、第 1 次調査を終了した。

層序：第1次調査において把握した基本となる層序は、I層：表土、II層：礫等をほとんど含まない均質な褐色土、III層：黒褐色土、IV層：黒褐色土、V層：黄褐色砂質土、VI層：暗褐色土、VII層：灰黄褐色土となる。III、IV、VI層が遺物包含層である。VI層については、試掘確認調査、事前確認調査では確認できず、1次調査終盤に深掘りを実施した2箇所のテストピット（T.P）で確認することができた。

遺構：G-9～10 グリッドIII層で焼土を確認したのみである。

成果：E～G-15～17 グリッドIII層、IV層から縄文早期から中期にかけての多くの遺物が出土した。深掘りを行った2箇所のテストピット及び調査区北側の一部で縄文草創期の遺物を検出し、VI層の存在を推測することとなった。

#### （4）第2次調査

期間：昭和63年5月9日～9月8日

調査地：B～G-29～7 グリッドの約360 m<sup>2</sup>

経過：重機によるI、II層の除去後、第1次調査時の調査区東側1m幅のトレーナーを拡大し、調査区北側から掘り進めた（写真40）。5月下旬以降、C～G-11 グリッドより南側の広い範囲でVI層を掘り進めたものの、同層中には遺構と共に伴するか否かを問わず、トゥールをはじめ剥片やチップが広く大量に分布していた。トゥール、剥片、チップが大量に含まれていたVI層については、現地ですべてを登録することが困難であったため、登録遺物以外のVI層は土ごと持ち帰り、水洗選別作業を行い精査することとした。持ち帰った土は土嚢袋6,000袋を超えた。

層序：I～VI層は1次調査同様。VI層を掘り進めたところ、後述する大形竪穴状遺構をVII層上面に検出し、最下層の文化層と判断した。

遺構：第1次調査で焼土を検出した調査範囲北側にあたるG-8～10 グリッドのIII層下部にて、土器埋設石組炉（EU2, EL1）を有する1号住居跡ST1（写真46）を確認した。住居跡内にて別の埋設土器（EU1）を伴う土坑を確認した。調査区中央部のE～G-16～17 グリッドIV層下部において、2号住居跡ST2（写真47～49）及び住居跡と切り合う土坑1基（SK6）を確認した。B～D-21～23 グリッドにおいて縄文草創期に属するVI層の掘り下げにより、大形の竪穴状遺構ST4（写真72～82）を確認し、他に6基の土坑及び3箇所の剥片集中地点、2箇所のデボン状出土地点を確認した。

#### （5）第3次調査

期間：平成元年6月1日～平成元年6月30日

調査地：第1次、第2次調査範囲の中央部より東側へ突き出した約30 m<sup>2</sup>。

経過：町道改良工事に伴い接続する農道の取り付け部分の設計変更を受けて、急遽実施することとなった。表土からIII層までを重機による土取りを行い、IV層以降精査を行った。面積は30 m<sup>2</sup>と小さいが、第2次調査で遺物が大量に出土した地区の隣接地であり、同様にVI層から多くの遺物が出土した。

遺構：土坑等は確認することができなかったが、c-5 グリッドVI層にて剥片集中地点1

箇所（写真 239）とデポ状出土地点 1 箇所（写真 246）を確認した。

遺物：大量の剥片（写真 237, 238）が出土し、第 2 次調査と同様に剥片集中個所とそれ以外の範囲を識別するのが困難なほどであった。VI 層の掘り下げ時、これまでの調査同様に棒状の礫が出土し始めると剥片やトゥールが多く出土する傾向があった。その他、多様な石器が出土した（写真 240 ～ 246）。また、小規模ながら剥片や石器がまとまって出土する箇所がみられ、約 300 袋を土嚢袋で持ち帰った。

## 2. 遺物の取り上げ方法

現地調査にて登録した遺物は、第 1 次調査において縄文土器 417 点、石器・石製品 1,038 点、第 2 次調査では縄文土器 1,383 点、石器・石製品 13,166 点、第 3 次調査では縄文土器 394 点、石器・石製品 2,952 点、合計で縄文土器 2,194 点、石器・石製品 17,156 点にのぼる。

III 層・IV 層での土器の取り上げは容易であったが、VI 層では土器と堆積土が癒着している状態であり、取り上げは困難であった。特に外面が剥離するものが多く、1 個体がそのまま潰れたような状態で出土する土器もあり、そのようなものは発泡ポリウレタンを用いて取り上げた。例を挙げると、第 2 次調査において出土した No. 1, 5, 7 (RP-102) は深鉢土器が横倒しとなつて潰れた状態で出土した。土器片が二重三重に重なっていたため土器周辺の土を取り除き、木枠を組んでその中に発泡ポリウレタンを流し込み、固まるのを待つて下部をカットして取り上げた。

石器については登録数からみても多量に出土していることがわかるが、微細な剥片等を含めるとおびただしい量となる。現地調査では石器の登録、取り上げが最も時間を要した。VI 層土は南側において極端に粘性が強くなり、土の除去が容易ではなかったことや、自然礫と自然礫を利用した礫石器との判断が現場では困難であったことから、石器の登録は基本的にトゥール、3 ～ 5cm 以上の剥片、礫等に限定して取り上げた。それ以外のものについては、1m × 1m を単位として VI 層の土ごと土嚢袋に入れて持ち帰り、後日水洗選別を行うこととした。

第 2 次調査の際、石器の脂肪酸分析を実施すべく尖頭器、半月形石器、搔器を対象として、30 数点サンプリングを行った。サンプリングは所謂石油製品等は使用できないため、竹材を用いて石器周辺の土ごとカッティングして和紙とアルミホイルで梱包した。こちらの試料は保存が良くなくカビが発生したため分析はできなかった。その他に炭化物のサンプリングを実施している。

## 3 基本層序

日向洞窟遺跡西地区の調査区の範囲は東西約 10m、南北約 40m で、面積は約 400 m<sup>2</sup> である。調査区北半は南向きの緩斜面で、概ね 15 グリッドのライン (X=26) 付近から南側は平坦面となる。海拔標高は調査区北端で 224.000m、中央で 220.500m、南端で

219.500m を測る。当時の調査記録では、土色や締まり具合、礫の量や大きさを加味して細かく分層しているが、大きなまとまりとして基本層序を述べる。調査時は遺構堆積状況や土層の注記、出土状況などすべて記録を残したが、調査から長い時間が経過し、度重なる事務所の移転によって資料の散逸に見舞われており、完全に引き継げたわけではない。そのため、現在手元に残った資料は調査当時の記録として統合せず、そのままの断面図・平面図を提示する。詳細な土層観察については一部情報が欠如していることから、現在知り得る情報のみ提示する。

南北に長い調査区の断面図として調査区東壁 (H-6 から H-27) が記録として確認でき、第3次調査区にも距離的に近く層位が対比しやすいことからこの断面図を基本層序として扱う (図6、表3)。第I層が黒褐色 (10YR2/2) を呈する表土及び耕作土で、場所によって厚みに 10cm 前後の差があるものの層厚は約 40cm。I 層の下半が I a 層として分離された箇所がみられる。

第II層は植物根などが散見される暗褐色土 (10YR3/3) で、直下は極めて凹凸が激しく所々落ち込みが確認できるが、以前にゴボウ畠として使用されたためと認識している。

第III層は遺構や遺物が検出される黒褐色土 (5YR2/1)、河原石が入り込む箇所も確認される。

第IV層は同じく黒褐色 (7.5YR2/2) を呈する遺物包含層だが、締まりが強くなり礫もやや大きくなる。

調査段階でIV層下部では沈線文系の縄文土器が各グリッドで散見された旨、調査日誌に記載がある。

第V層は黄褐色砂礫層 (10YR4/2)。複雑に堆積したためか、粘土層と砂礫層の互層となり、局所的に砂層が入り込む。なお、第I洞窟前庭部の調査でも、縄文草創期の遺物包含層を覆う厚い無遺物層が確認されており、クロスラミナ状 (佐川・鈴木 2008) やレンズ状 (長井 2019) の砂層を一部伴うようである。

第V層は8層に細かく分けられたが、いずれも大小様々な大きさの凝灰岩礫が含まれる。V c 層とV c2 層は粘土層、V c' 層は砂礫層、V d 層は砂層として記録されている。下位になるにつれ暗褐色 (10YR3/3) が強まるようであり、V d 層とV e 層がこれに当てはまる。本調査においても無遺物層として認識され、調査区南側では厚く堆積するが、15 グリッドより北側では検出されない。なお、第3次の調査区については北西方向を向く形でグリッドが組まれており、第2次調査区のグリッドに換言すると第3次調査区の南北位置は 14 から 18 グリッドに収まる範囲である。もちろん、第3次調査の基本層序は第1・2次調査の基本層序と同じであるが、第3次調査区東壁の断面で確認すると第V層は調査区北端、つまり第2次調査区のグリッドに換言すると 13 グリッドのラインまで伸びていることが確認できる。これは南壁でも確認できる。したがって、グリッドの交点 d-3 と G-15 を結んだラインを延長した南側がV層の広がりとなる可能性がある。

続く第VI層は暗褐色（10YR2/2）を呈する遺物包含層。凝灰岩の礫が多く入りこむ。粘性がやや強くなり、炭化物も多く含まれる。最初にVI層として認識したため、のちに上層と下層で分ける際に上層をVI層、下層をVI c層として当初の分層名が残ったようである。第V層は遺物をほとんど含まないため、出土遺物の特徴から第V層より下位は縄文草創期として時期的なまとまりがあると考えられた。したがって、VI層とVI c層を合わせて大別VI層として扱う。このVI c層は凝灰岩の崩壊土としての色が濃くなり黄褐色（7.5YR4/1）を呈する。

続く第VII層は灰黄褐色（10YR5/2）となり、遺物の出土も少なくなる。

第VIII層は褐色（10YR4/4）を呈する地山である。

なお、ローマ数字の後ろにアルファベットやダッシュ記号が付されているのが分層で、ローマ数字を大別層位として捉える。観察表内の層位で数字を丸で囲むものは掘り下げ回数を示すものと思われる。第I層（I、I a、I b、I c、I d）、第II層（II、II a、II b）、第III層（III、III a、III' a、III' b）、第IV層（IV、IV a、IV' a、IV b、IV c、IV d）、第V層（V a、V b、V c、V c2、V c'、V d、V e）、第VI層（VI、VI' a、VI 2、VI a、VI b、VI b2、VI c'、VI c、VI d、VII）、第VII層（VI e、VI e'、VIII、IX、IX'、X、XI）を大別層位とし、括弧内の細かな層位を指す場合は分層名を示す。この細別層位は基本層序となる調査区東壁断面図内（図6）で使用されている。なお、大別VI層からVI c層を分けるならば、細別VI・VI'層の下位、細別VI b～VII層をVI c層と想定しているが、情報が欠如しているためこれ以上は言及できない。

出土遺物の特徴から、概ね第III層は縄文中期、第III層から第IV層は縄文前期、第IV層は縄文早期の遺物包含層であり、ほぼ無遺物の層である大別V層を挟んで、大別V層下位のVI層とVI c層において縄文草創期に比定される遺構や遺物が出土した。

#### 4 出土遺物と分類基準

##### （1）縄文土器型式

日向洞窟遺跡西地区出土の縄文土器は総点数2,511点にのぼる。このうち130点を掲載した。後述するが、土器の多くが、特に大別VI層出土の土器については未だに土が除去されずに出土したまま、土塊の状態で保管されている。大別VI層は凝灰岩礫を含み、下層になるほど凝灰岩の崩壊土としての色が濃くなる。

崩壊した状態にあっても非常に締まり、掘り下げるのにも支障をきたす状況であった。当時、土器が出土した際に付着する土を除去すると、同時に土器の器面も剥落するため、土塊のまま取り上げて、そのままの状態で保管されている。非常に脆いことから採取可能な土器片は限られた数に留まる。大別VI層から取り上げることができた土器片は1,257点であり、いずれも小片ではあるが全体の半分ほどを占める（表4）。

このうち大形堅穴状遺構ST4内出土は132点で大別VI層中では10.5%を占めるが、遺存状態が悪いため掲載することができなかった。大別VI層出土の土器の多くは無文であり、土器胴部片と思われる。つまり施文と認識した個体は今回掲載した30点ほどで

あるが、実際の土器の保有数は一般的な当時の想定よりも多いと考えることもできる。大別VI層出土の土器の大半は微隆起線文土器で爪形文と押圧縄文はそれぞれ1点を数えるのみである。当時の調査担当者が述べる通り、有舌尖頭器が非常に少なく、石鏃が膨大であることを考慮するならば、細隆起線文土器を残しつつも、微隆起線文土器が主体であった段階という見解が妥当といえる（井田 2006）。

なお、今回は置賜地方の該期の土器編年を端的に示した長井市史の編年表を基本的に用いる（長井市史編纂委員会 2019）。縄文草創期の隆起線文には、やや幅のある貼付粘土紐に押し潰しや刻みを施すもの、並列した籠状工具の押圧によって浮き出させたものがみられる。時期をあけて縄文早期前葉の押型文、さらに時期を経て縄文早期中葉から縄文後期前葉まで若干の間隙があるものの継続するようである。縄文早期中葉からの型式を浚うと、田戸下層式、田戸上層式、明神裏Ⅲ式に比定される貝殻沈線文系、その後の野島式、鵜ガ島台式などの貝殻条痕文系、前期初頭の上川名Ⅱ式や前期大木式、中期大木式に他地域の型式が伴う。なお、VI層上位から出土した土器についても、出土した型式は網羅したものと思うが全ての資料を取り上げることができなかつたため、将来的な報告としたい。

## （2）石器組成と石材

現段階での日向洞窟遺跡西地区の出土石器総点数と総重量を示す（表4）。今回報告書に掲載した遺物は4,905点。このうち礫や剥片を除く器種同定された石器は4,619点を数え、総出土点数の約0.23%、重量は130kgで約12.08%を占める。総点数の1%にも満たないことからもわかる通り、水洗選別で得られた3mmの微細剥片などを含む総出土点数は1,991,095点、総重量は1,077kgにおよぶ。点数の多さは水洗選別で得られた微細剥片の多量さ、重量は棒状礫の多さが影響している。水洗選別で得られた資料を抜くと53,135点、864kgと微細剥片の多さがわかる。3次調査の水洗選別5mmの抽出toolが少ない理由は積極的に遺物の取り上げを実施したためと考えられる。また、3次調査の水洗選別3mmの点数が少ない理由は整理方法で後述する通り、大部分が手つかずの状態のためであり、2次3次調査の1mmの選別についてはいずれも未着手である。

器種認定に際して、東北学院大学の佐川正敏氏と鈴木雅氏、大場正善氏による既報告『日向洞窟遺跡西地区出土石器群の研究Ⅰ』（佐川・鈴木編 2006）（以下、東北学院報告と記す）に依るところが大きい。また、井田秀和氏、渋谷孝雄氏の分類を参考とさせていただき、石器の平面形態で大別分類とした。一方、作業の工程や再加工の剥離などについては既報告に則った。東北学院報告と本報告書の総点数に差が生じている要因は水洗・通常取上げ資料を追加していることが大きいことは表からも読み取れる。また、二次加工が施されているもののいずれの器種を志向しているのかが不明瞭なものについて、二次加工のある剥片や不定形石器と留保せずに積極的に分類したことも挙げられる。複数の器種が想定できるもの、転用されているものも一定数存在しており、その場合は

いずれか一方の器種とみなし、もう一方の器種については文中で触れることとする。

西地区から出土した石器は、尖頭器 306 点、有舌尖頭器 4 点、半月形石器 36 点、石鏃 2,288 点、石錐 114 点、搔器 431 点、削器 713 点、籠形石器（石籠）178 点、両面加工石器 253 点、石核 12 点、接合資料（剥片）14 点、石斧 143 点、有溝砥石 39 点、砥石 12 点、敲石 22 点、凹石 31 点、磨石 15 点、石皿 5 点、有孔礫 2 点、線刻礫 1 点、礫 286 点、合計 4,905 点にのぼり、石鏃の点数が全体の半分を占めている。東北学院報告における分析を援用して大別VI層出土の石器をみると、両面加工石器や礫などを除いた石鏃や尖頭器などの狩猟具が 63.9% (2,340 点) を占め、搔器、籠形石器、石斧といった加工具が 36.1% (1,321 点) を占める。また、礫石器などを除いた尖頭器や籠形石器、石斧などの主に原石か大形剥片を素材とする石器は 20.1% (758 点)、石鏃や搔器などの剥片素材の小形石器は 79.9% (3,010 点) を占める。これらの石器の素材生産に関わる石核は 9 点と極端に少ない。全体的な傾向として、完形品の割合は尖頭器が 9.8% (30 点)、石鏃が 17.9% (410 点)、石斧が 27.3% (39 点) と少なく、大部分は製作途中あるいは使用による欠損と考えられる。一方、搔器は 40.6% (175 点)、石錐は 43.8% (50 点)、籠形石器（石籠）は 55.1% (178 点) と概ね半数、有舌尖頭器は 4 点全てが完形品である。佐川氏らは石鏃など石器の集中的な製作は石器製作址としての性格を明瞭に示しており、完成品の槍先形尖頭器が積極的に遺跡外へ搬出された可能性があることから、单一集団内の石材消費行動として完結するものではないと考察しており、本報告は東北学院報告を補強する形となった。

石材については珪質頁岩が 82.2% (4,032 点) と全体の大部分を占める。次いで頁岩 6.0% (295 点)、泥岩 3.4% (170 点)、凝灰岩 1.1% (57 点) など堆積岩で 93.8% を占める。火成岩については流紋岩 2.5% (126 点)、

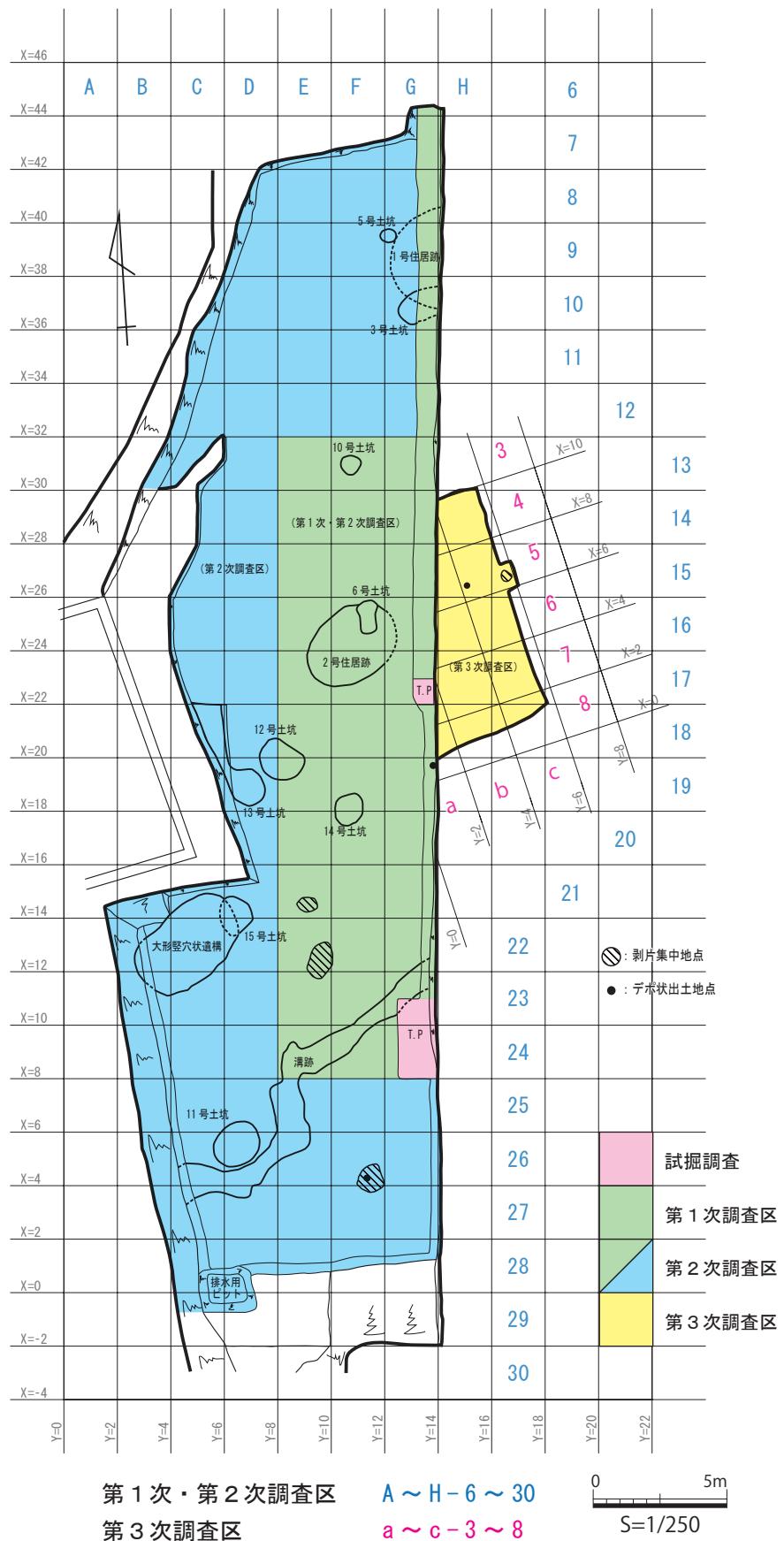
デイサイト 1.9% (92 点)、安山岩 1.0% (50 点)、花崗岩 0.2% (12 点) などで占めるが、点数は少ない。なお、斑状構造と流理構造がみられ石英を多く含む白色系のものを流紋岩、石英以外に斜長石がみられ断面が粗粒のものをデイサイト、石英がほぼなく輝石などを含む黒色系を安山岩とした（川端 2021）。

特徴的な石材として黒曜石 5 点、メノウ 5 点、玉髓 4 点、碧玉 2 点、片麻岩 3 点、鉄石英 1 点、蛇紋岩 1 点、ネフライト 1 点が挙げられる。黒曜石は石鏃 4 点、搔器 1 点。VI層出土の石鏃 No. 1736, 1742 は全体的に多くを占める凹基ではなく尖基であることも特筆される。メノウは石鏃 1 点、石籠 1 点。いずれも縞模様が明瞭に観察できる。

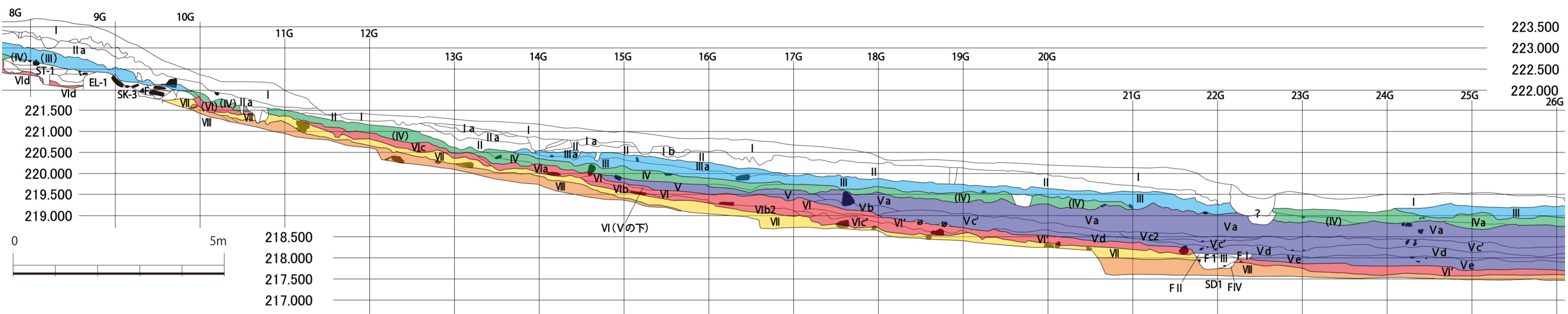
玉髓は石鏃 2 点、石錐 1 点、両面加工石器 1 点。半透明白色を呈する。碧玉は石鏃 1 点、石錐 1 点。不透明で鮮やかな赤色を呈する。片麻岩は 3 点とも礫。日向洞窟の 3km 南側に屋代川が西流しており、大友幸子氏との出土礫同定に伴う河川礫の調査において屋代川上流部の大滝川で片麻岩が、屋代川で鉄石英が多く採集された。また、大滝川では花崗岩や安山岩も採集でき、稻子峠層が主体であることが地質図（本田 2016）から読み取れる。大滝川と屋代川の合流点より下流の有無川上流部では大沢層が主体で流紋岩

やデイサイトが産出するようである。また、蛇紋岩製の磨製石斧について、同定後比重測定による判断を大友氏から助言いただき、同じ重さの泥岩と比較したところ泥岩の比重が2、石斧が3という結果になったことから、蛇紋岩の蓋然性が高いといえる。

珪質頁岩、頁岩、流紋岩では点数の多い石鏃が半数近くを占める一方、泥岩や安山岩、デイサイトはあまり石鏃に用いられず石斧が一定数占める。そのほか、凝灰岩や砂岩、花崗岩などは礫石器で用いられるようだ。なお、こうした全体的な傾向は大別VI層にも概ね当てはまる。明瞭な石材選択における二大別化（珪質石材と粗粒石材）は西地区周辺の石材環境のほかに、主として石器の機能と密接に関わっていたとする東北学院報告の考察が妥当と思われる。



第5図 各次調査区平面図



日向洞窟遺跡西地区の基本層序(東壁H-7~H27) VI層が縄文時代草創期の包含層

日向洞窟遺跡西地区出土遺物 総数・総重量表

石 器	点 数	重 量:g	石器水洗除外	点 数	重 量:g	
RQ1 次	1, 038	32, 445. 43	RQ1 次	1, 038	32, 445. 43	
RQ2 次	13, 166	582, 974. 75	RQ2 次	13, 166	582, 974. 75	
RQ3 次	2, 952	131, 570. 47	RQ3 次	2, 952	131, 570. 47	
RQ2 次 水洗選別 5mmTool	1, 760	3, 952. 88	通常取上げ 1 次 Tool	263	5, 530. 17	
RQ3 次 水洗選別 5mmTool	97	174. 46	通常取上げ 2 次 Tool	806	30, 667. 09	
RQ2 次 水洗選別 3mmTool	175		通常取上げ 3 次 Tool	118	2, 869. 30	
RQ3 次 水洗選別 3mmTool	4		通常取上げ 1 次剥片	8, 426	19, 010. 28	
水洗選別 2 次 3mm 剥片	1, 586, 113	43, 389. 35	通常取上げ 2 次剥片	17, 540	43, 321. 71	
水洗選別 3 次 3mm 剥片	13, 131	400. 21	通常取上げ 3 次剥片	8, 826	15, 303. 51	
水洗選別 2 次 5mm 剥片	302, 961	153, 906. 53	合 計	53, 135	863, 692. 71	
水洗選別 3 次 5mm 剥片	33, 719	12, 175. 81	全 体	1, 991, 095	1, 077, 691. 95	
通常取上げ 1 次 Tool	263	5, 530. 17		2. 67%	80. 14%	
通常取上げ 2 次 Tool	806	30, 667. 09				
通常取上げ 3 次 Tool	118	2, 869. 30	土 器	点 数	VI層	ST4 拠含む
通常取上げ 1 次剥片	8, 426	19, 010. 28	RP1 次 + 通常	681	75	
通常取上げ 2 次剥片	17, 540	43, 321. 71	RP2 次 + 通常	1, 383	927	
通常取上げ 3 次剥片	8, 826	15, 303. 51	ST-4 拠	53		
合 計	1, 991, 095	1, 077, 691. 95	RP3 次 + 通常	394	255	
	100%	100%	合 計	2, 511	1, 257	132
石器 Tool のみ (棗除く) 掲載	4, 619	130, 202. 759	掲 載	130		
	0. 23%	12. 08%	全体の割合	5. 18%	50. 06%	5. 26%